

## ツェランとハイデガー——詩「トートナウベルク」をめぐって

宇京 頼三

### 【要旨】

パウル・ツェランはルーマニア生れのユダヤ人で、二十世紀後半のドイツ語表記の最大の詩人として後半生をパリで送った。マルティン・ハイデガーは二十世紀の哲学・思想を代表する哲学者の一人である。詩「トートナウベルク」はツェランが南西ドイツのシュヴァルツヴァルトにあるハイデガーの山荘を訪れたあと、ハイデガーのナチズム加担をめぐって書かれたものである。本稿では、この詩「トートナウベルク」が二人にとって如何なる意味をもっていたかを主として、新資料である、ツェランと夫人のジゼル・ツェラン＝レストランジュが交わした膨大な『書簡集』（フランス語版）に基づいて考察している。

### —はじめに—

エンツォ・トラヴェルソ著『アウシュヴィッツと知識人』（岩波書店、二〇〇二年）を翻訳出版してまもない頃、私の手元にフランスの月刊文芸誌『マガズィヌ・リテレル』の二〇〇二年新年号が届いた。ばらばらと捲っていると、たまたま「ツェラン／ハイデガー——出会いをめぐって」と題する記事が目飛び込んできた。このドイツ語表記のユダヤ詩人とフライブルクの「存在」の哲学者の関係については、『アウシュヴィッツと知識人』でも触れられており（一六三―四頁）、また訳者の私も解説で、「我々のアウシュヴィッツ理解を哲学的または歴史的考察

ではなく、詩によって手助けしてくれる」特異な存在として、ツェランに短く言及した手前、この論説には大いに興をそそられた。一読後、早速トラヴェルソ氏に電子メールで見解を求めたところ、すぐに案の定、否定的な答えが返ってきた。新味はない、と。恐らく、この記事の著者の一人がフランスでは有名なハイデガー信者のフレデリック・ドゥ・トヴァルニキだからでもあろうが、ツェランとハイデガーの関係は複雑にして微妙である。因みに、マックス・ドラ著『ハイデガー、プリーモ・レーヴィとセコイヤ』によると、世にハイデガー教なるものがあった、ハイデガー狂い、ハイデガー病なる者がわんさといふらしい。（この本は、「この物語には、いかなる客観性もない。私はユダヤ人で、ハイデガーが大嫌いだ」という挑戦的な一文で始まるユニークなハイデガー論である。二〇〇一年、ガリマール）。ハイデガー信者にとっては、『存在と時間』の哲学者は、まるでプラトンかアリストテレス級のスケールを持った存在であったのだ（実際、そうなのだろう）。特にフランスでは、ハイデガーの名声ドイツでよりもはるかに高く、その政治的過去は隠蔽され、この大哲学者に逆らう者はそうした信者たちから「凡俗どもの陰謀という不名誉な烙印」を押されるほどだという。現在も、まだ三十巻以上のハイデガーの著作が刊行予定であるそうだが、もっとも、それはある時期からはドイツでも似たようなもので、浩瀚なハイデガーの評伝を著したフーゴ・オットが公開講義で成果を発表すると、「不敬罪も同然であった」

という（『マルティン・ハイデガー』、邦訳九頁）。

確かに、パリで半世紀以上にも渡って、準拠すべき哲学者という特権的位置を占めた後、フランスの知的風景にあっては、ハイデガーはヴァルター・ベンヤミンやハンナ・アーレントなど別の守護神的存在のために幾分影が薄くなったような感がある。しかし、フィリップ・ラクーールバルトの『ハイデガー——詩の政治』をはじめとする幾つかの著作や、シンポジウム「ハイデガーの現在」（二〇〇二年、十一月）が開催されたりするのを見ると全くそうではないようだ。特に、フランス国立図書館と国営の文化放送フランス・キュルテュール共催のこのシンポジウムでは、内外の専門家・研究者たちだけでなく、あらゆる年齢層の多彩な聴衆で、国立図書館の大ホールは満員だったという。それにしても、一体なぜこの峻厳かつ難解な哲学がこれほど熱烈に受容され、ナチズムとの胡乱な関係があったフライブルクの哲人が人気を博すのか。ドリユ・ラ・ロシエルやブラズィヤックのようなナチに加担した知識人が厳しく弾劾され、クラウス・バルビーやモーリス・パボンなどのコロボ（対独協力者）が執拗に断罪された国、フランスにしては何とも不思議なことである。なにしろ、「フランスでは、ハイデガーが戦後すぐに非ナチ化され……レジスタンスの闘士にまで持ち上げられて」いたのだから（ヴィクトル・ファリアス『ハイデガーとナチズム』（邦訳）のユルゲン・ハーバースの序文）。

折しも、本年二〇〇三年はフランクフルト学派の巨頭テオドア・アドルノ（一九〇三—一九六九）の生誕百年を迎え、数々の記念出版やテレビ放送、大規模なシンポジウムなどが行われたというドイツはもとより、フランスでも控え目ながらこの『否定の弁証法』の思索家に敬意を表している。実際、フランスの知識人は、ミシェル・フーコーやピエ

ル・ブルディユをはじめ、アドルノに負うところ大であるといわれる。アドルノ賞を受けたジャック・デリダもアドルノへの知的負債を認めているという。ところで、そのアドルノが憤慨するほど、フランスの大学界ではハイデガー主義が蔓延し、ハイデガー信者が跋扈していたのである。プルーストやバルザックの大讃美者だったアドルノにとって、こうした現象は耐え難く、憤懣やるかたなかったであろう。フランスには、まるで難解・晦渋で、術語隠語まじりのテクスト、政治的過激主義の阿片がまぶされ、およそ社会科学の簡潔明瞭さとは無縁な、暗く深いゲルマンの森から発したようなドイツ思想に対するコンプレックス、またそうしたものに対していたずらに心酔する悪しき習慣でもあるのだろうか。

ところで、これまでもパウエル・ツェランとマルティン・ハイデガーの関係については、国の内外を問わず、様々な立場から論じられてきている。例えば、ツェランがハイデガーと出会った後に書いたという、あの有名な詩「トートナウベルク」についても、フィリップ・ラクーールバルト『経験としての詩』、ジャン・ボラック『誰でもないギリシア』（特に、「死の山——ツェランとハイデガーの出会いの意味」）、平野嘉彦の「物語の余白に——ツェランと〈哲学者たち〉」（『物語』所収）などの優れた論者がある。ましてや、ハイデガーの人・思想と「政治」やナチズムの係わりについてはあり余るほどの資料がある。ジャック・デリダが言うように、「今日我々は、この問題の古典的な側面を、そして今となつては余りにアカデミックな枠にはまってしまった側面を読み解くのに十分なほど多くの文献を手に行っている」（『ハイデガーの手（ゲシュレヒトII）』、『現代思想』一九九九年五月号所収）。しかし、ツェランがセーヌ川に入水した一九七〇年以来、この「戦後最大のドイツ語詩人」とやは

り前世紀最大の哲学者の一人とされる、『存在と時間』の著者の関係には、いまだ秘められた闇の部分があり、問題性が残っているようだ。「恐らく世界中で、現在、パウル・ツェランほど論説や出版物が捧げられている詩人は少ないだろう」（『パウル・ツェラン特集』、『ヨーロッパ』二〇〇一年一月二月号、三頁）が、まだまだ新事実が出てくるであろう。ツェランの遺稿、手紙、日記、メモなどの資料類はドイツのマールバッハの文学資料館に収蔵保管されているそうだが、死後五十年間は一部を除いて閲覧禁止、つまり二〇二〇年まで封印されたままであるとなれば、なおさらである。この制限措置は、ツェラン未亡人ジゼルが望んだもので、詩人の遺稿資料類がこの文学資料館に売却された時、契約で取り決められたものだという。なお、ハイデガーの草稿もこの文学資料館に眠っており、閲覧も無制限に自由ではないそうだ（ヴァクトル・ファリアス前掲書、三四三頁）。

以下、この二人、「ドイツ文学の塊」のような詩人とメスキルヒの哲学者の関係がどのようなものであり、実際トートナウベルクで何が起こったのか探ってみたい。幸いにして、フランス語による「二次的ゴープス」ながら、両者に関する文献資料は多数あり、なかでもこの近年に注目すべき著作、資料が現れた。P・ツェランとジゼル・ツェランⅡレストランジュ夫妻の、膨大な注釈付きの『書簡集』全二巻、死の二年前にツェラン自身が編んだ『詩選集』の、ドイツ語原詩付きの仏訳版、『フランスにおけるハイデガー』全三巻、そして前記のマックス・ドラのハイデガー論、月刊誌『ヨーロッパ』のツェラン特集号などである。こうした最新版のデータを元に、手に入る限りのフランス語による資料、読み得る限りの日本語の文献・著作類をふまえて、敢えて試してみたい。

一体この二人の間にはどのようなことがあったのだろうか？ ラクーーラバルトは「ツェランのポエジーはその全体がハイデガーの思想とのひとつの対話である」と書いているが（前掲書邦訳、七九頁）、この詩人と哲学者の間にはその真の対話があったのか？ それとも「こうもり傘とミシンの出会い」だったのか？

★ ★ ★

フランスの有数なハイデガーの読み手である、フィリップ・ラクーーラバルトによると、ハイデガーは生前、所蔵していたフランス語の本の一部をストラスブール大学の哲学科図書室に遺贈すると言っていたという。一九七六年、この偉大な哲学者が死去すると、ラクーーラバルトは、「恐らく同僚の」リュシアン・ブロンと一緒にそうした書籍を受け取りにハイデガー宅を訪れた。「彼（ハイデガー）が死去した部屋で、私は、彼が大きな書棚から下ろしていた本を注意深く見ました。ドイツ風の分厚い哲学史や各種の語源辞典の他に、ナイトテーブルの上には、ヘルダーリン、ゲーテ、ズールカン版のツェランの詩集がありました。勿論、アリストテレス、ヘーゲル、カントもありました。でも、本は多くはなく、ひと棚分と大きなナイトテーブルにあるものでした。壁には、ブラックの小品が掛かっていました」（『フランスにおけるハイデガー』第二巻対話集、二〇九頁）。

ツェランがパリのエミール・ゾラ大通りのアパルトマンから姿を消した、一九七〇年四月二〇日頃、別居していても知らない妻のジゼル・ツェランは、夫の部屋を訪れて、夫の腕時計が置いてあるのを見て、この次第を悟った。ツェランは生前、腕時計があるのを見たら、自分は

いなくなつて（消えて）いるものと思つてくれと言つていたからである。机の上には、ヘルダーリンの伝記（一九六七年のインゼル版）が開かれ、そのまま置かれ、クーレメンズ・ブレンターノの手紙の抜粋の次の一文に下線が引かれていた。「時折、この天才は暗くなり、その心の苦い井戸の底に没する」（四六四頁）。同年五月一日、セーヌ川下流の濾過装置に引つ掛かつていたツェランの遺体が発見されてまもなく、エミール・ゾラ大通りの詩人の部屋では多くのメモや未発表の詩の草稿が見つかった。その中に、ハイデガーに関する紙片（恐らく手紙の下書き）があった。この紙片は、一九九一年、ジゼル・ツェランが死去した後、彼女自身によつて仏訳され、「（パウルのメモ）」と付記された紙片とともに詩人の机の上で発見された。それには、こうあった。

「：自らの態度によつて、あなたは詩的なるものと

また敢えて言いますが、哲学的なるものを

その二つに備わっている厳肅な責務という点で

決定的に弱めてしまったこと」（前掲ツェランとジゼル『書簡集』

第二巻、五九八頁）。

ところで、この二人の死にまつわるエピソードは一体何を物語るのか。結論から先に言うと、ツェランとハイデガーは死に至るまで互いに相手の想念の世界に、消し去り難いオプセッションとして棲み続けていたのである。比喩的に言うならば、ツェランは流亡の民ユダヤの怨念のこもつたダビデの星（黄色の星）の光芒と化して、トートナウベルクのハイデガーの山荘にある井戸の上の「星形の糞」を照らし続け、眼光鋭くハイデガーの「責任」を終生問うていたのである。周知のごとく、「存在」

の哲学者はこれを終生無視し続ける。それにしても、なぜか？「あれほど真理の探求に熱狂した男がどうしてかくも哀れなる過ちを犯したのか？」（M・ドラ、前掲書、一五一頁）。何千頁にもわたつて延々と「存在」について論じてきた哲学者が、一九三三年、ヒトラーがいかなる人物なのか、どうして理解できなかったのか？この疑念は依然として残る（フーゴ・オット『マルティン・ハイデガー』やヴィクトル・ファリアス『ハイデガーとナチズム』には、「ナチ・ハイデガー」の実態が余すところなく描かれているが）。

確かに、ハイデガーは一九四五年、個人的には「大変愚かなこと」をしたと認め弁解しているが、それまでずっとナチ党に党費を払い続けていたのである。そして以後は、この過ちについては一切論評せず、ジェノサイドの大罪にも一言も触れず沈黙を通した。良心の呵責も後悔の念も自己批判も示さなかった。ラクーラバルトのいう「パルドン（赦し）すまない」の一言さえなかったのだ（前掲書、九三頁）。それは、「ツェランの最も深い読み手であり」、その詩を近現代詩の最高峰とするジョージ・スタイナーが言うように、「ハイデガーがその人間的資質において卑小な性格であり」、シュヴァーベンの「農民的伝統」に取り憑かれていたからであろうか（Q・スタイナー『ハイデガー』邦訳、三六頁）——なお、このハイデガーの農民的相貌や性格については、弟子のH||G・ガーダマーをはじめ、フライブルクの同僚のG・リッター教授などの証言がある。またファリスムも、ハイデガーの故郷、南ドイツ、シュヴァルツヴァルトとの密接な結びつきを指摘している（前掲書、特に第二部第六章）。謎である。大いなる高貴な精神にも人間の卑小・愚昧が宿るといふことなのか。

いずれにせよ、「人間としてのハイデガーは哲学者ハイデガーよりも

劣っていた、少なくともある時期はと言わざるをえない」（前掲『フランスにおけるハイデガー』第一巻、一〇三頁）ことになるのか。ツェランとハイデガーがはじめて会った一九六七年、ハイデガーの弟子でもあったハンナ・アーレントは同じフライブルク大学で、いわば〈里帰り〉講演をしている。師のナチの過去をめぐる長らく断交していたアーレントは師との関係がある時から修復しているが、彼女はこの「存在」の哲学者が講演会場に入ってきたのを見て、ひたつと静まり返った聴衆を前にして、「敬愛すべきマルティン・ハイデガー」と呼びかけて話し始めたという。人とその思想とは別であるということなのだろうか？

それに対して、ツェランの場合は、「アウシュヴィッツ」という近代の野蛮、ドイツ人の手によるユダヤ人大虐殺がツェランという人間存在「詩人中の詩人」としての「存在」の根幹に係わるのである。彼はユダヤ人という自己の負の存在のアイデンティティを媒介にして、このアウシュヴィッツの重みを引き受け、己れの母語でもあり自らの同胞を虐殺した「敵国」の国語でもあるドイツ語を武器として表現手段にして、自死に至るまで闘い続けたのである。（因みに、ツェランはアウシュヴィッツやベルゲン・ベルゼンのような絶滅収容所の生残りではない）。恐らくその主要な「敵」が、シュヴァルツヴァルト（黒い森）に棲む怪物的哲人、ゲーテの言葉とドイツ性という精神世界を象徴し代表する存在、即ちハイデガーだったのだろう。ツェランにとって、ドイツ語という言語のもたらすパラドックスは圧倒的であり、その言霊は「死の言語」の毒気となってツェランという存在の骨の髄まで入り込んでいる。ツェランにとってドイツ語はいわば諸刃の剣だったのである。ドイツ語は「アウシュヴィッツが発音された言語、アウシュヴィッツを発音した言語」（ラクーラバルト前掲書、九一頁）であり、これを使って何千頁も「存在

について論じ続ける哲学者がそのことを忘却・沈黙・無視するのを、ツェランは許せなかったのだ。詩人は、「無および存在の意味の問い、無の経験を経由する存在の真理の問い」（J・デリダ『シボレート』邦訳、一九七頁）に答えない「ある別の種類の賢者」の「責任」を問い糾し続ける。確かに、パウル・ツェランという詩人とマルティン・ハイデガーという哲人の精神的・内的関係は深く、緊密であろう（この比較分析は私の手にあまることだが）。それは、スタイナーやラクーラバルトがいみじくも指摘するところである。いわく、「ハイデガーの肖像を描くにあたってP・ツェランは重要であるし…P・ツェランの全く革新的な語彙やある程度まではその統語法でさえもが…ハイデガー的である」（スタイナー、前掲書、三六頁）。「ツェランの詩にはハイデガー流の新造語や溶接語が貫通している」（同書、六〇頁）。「ツェランのポエジーはその全体がハイデガーの思考とのひとつの対話である」（ラクーラバルト、前出）。ツェランがハイデガーを読み出したのは一九五三年一月三月の『存在と時間』第一部からとされるが、同年七月八月にも『森の道』読書の記録があり、こうした「五〇年代のハイデガー精読が彼の詩と詩に関する理論的考察を育んだ」（前掲『書簡集』第二巻、四九二頁）のであろう。

このように、ツェランにはいわば〈ハイデガー・オペレーション〉、〈ハイデガー・コンプレックス〉があり、彼の全存在にまつわりついている。そのことは、前記のツェランとジゼル夫妻の往復書簡にもうかがえる。この『書簡集』は二〇〇一年三月にドイツ語とフランス語で同時出版された画期的なもので、一九五一年の二人の出会いの時からツェランの死の一ヵ月前までの手紙を収めており、いわば「二重唱の伝記」をなすものである。特に、この七三七通に及ぶ『書簡集』は後半生を過ご

した詩人のパリでの生活とその文学的境涯をほぼ全面的にカバーするもので、これまで知られていない事実もあるようだ。さらに興味深いのは、こうした手紙がツェランの亡命言語であるフランス語で書かれており、我々読者はいわば〈フランス語作家〉としてのツェランに出会えることである。この『書簡集』については後述するが、今はハイデガーとの係わりを見てみよう。

ツェランがハイデガーと初めて会ったのは、詩人がフライブルク大学で朗読会をした日と翌日の一九六七年七月二十五日、シュヴァルツヴァルトのトートナウベルクにあるハイデガーの山荘においてである。この年、ツェランは年初から極度の精神不安定に陥り、一月三十日には自殺未遂を起こし、妻ジゼルに間一髪で救われる。ただ、ペーパーナイフで刺した左肺の損傷がひどく、手術を受けている。二月十三日から十月十七日までは、サン・タンヌ精神病院に拘禁され、治療を受ける。但し、この入院は四月末からは外出許可となるもので、しかもこの長期の入院加療中も、ツェランは旺盛な読書をし、アドルノ、フロイト、ジャベス、シェストフ、レヴィイストロース、トーマス・マン、シェークスピアなどを読み（二月―五月）、詩集『糸の太陽』や『光の衝迫』の大半を書いている。これは些か驚くべきことだが、ツェランの年譜を見ると、『書簡集』第二巻、四五九―五六九頁）、彼は初の入院以来（一九六二年末）、入院を繰り返し返しており、こうした生活がいわば日常化しているのである。翻訳の仕事は勿論、詩作活動も普通に行っていたのである。この「詩人中の詩人」にとって、想念の世界と現実界、虚と実の境界はあったのだろうか。五月には、パリ高等師範学校のドイツ語教師の職に復帰し、授業を再開している。

したがって、ツェランがハイデガーと会ったのも入院期間中であり、

医師の許可を得てドイツに旅行した折（七月二十二日―八月二日）なのである。さて、トートナウベルクでの出会いであるが、『書簡集』でこの時期の前後の手紙を見ると、ハイデガーに対するツェランの不安感（または不快感）が垣間見える。妻ジゼルに旅支度を頼みながら、「フライブルクでの朗読会は二十一日か二十四日に行うが、ハイデガーが来るかどうかにかかっている」（六月二十日付け）と書いている。また、パーゼル経由でフライブルクに行くこと知らせながら、「フランツ・ウルムからハイデガーに〈よろしく〉伝えてくれと頼まれたが、あまり嬉しくないね。実際、今度の旅行の本当の目的はフランクフルトであり、ウンゼルト、ライヒェルト、アレマンたちと話すことなんだから」（七月十七日付け）。ジゼルもその辺りの事情は分かっているようで、「ハイデガーが来ると、フライブルクでの朗読会があなたにとって少し難しくなることは分かります。でも、うまくいくようにと願っているわ」（七月十八日付け）と返事している。では、ハイデガーに会うという予定はなかったのだろうか？

ところが、このツェランの言葉とは裏腹に、実際はハイデガーと会うことを想定し、〈作戦〉まで練っていたようである。前記J・ボラックの回想によると、ツェランは彼に会いにきて、ハイデガーに会うことになりそうだと行って、こう付け加えたという。「彼（ハイデガー）はぼくに話さざるを得ないだろう」或いは「ぼくが彼に話させるようにする」だったか？」。二人ともハイデガーの態度には懐疑的だったが、ツェランは〈作戦〉は明かさなかったという。後日、ドイツから戻ると、彼はまたすぐボラックの所にきて、「何もしなかった」と告げたそうだが、ボラックは別の証言も挙げている。「ぼく（ツェラン）はただ彼（ハイデガー）がどう言うか見たかっただけです…それに、そのことでは詩

を書きましたから、後でお送りします」（前掲書、レナーテ・ベルンシュタインの話、四五九頁）。

しかし幸いにも、二人の不安とは逆に、この朗読会そのものは大成功だったようだ。「千人以上の聴衆が（…）ツェランが詩を読むのを聞きに来た。確かにこの大盛況は多くは好奇心からだろうが、ツェランがドイツ語の最も重要な現代詩人の一人と見なされていることを忘れてはならない。聴衆の数がやはりそれを雄弁に物語っている」（『バーディッシュ・ツァイトウング』一九六七年七月二十六日、『書簡集』第二巻、三八二頁）。

パリに帰ったツェランは、フライブルクでは一二〇〇人もが一時間の間、息を殺して朗読に聞き入り、終わると長い拍手をしてくれたので、十五分間延長したと伝え、そしてハイデガーについてこう書いている。

「ハイデガーがぼくの方に来たよ…朗読会の翌日、エルマール（ドイツの翻訳家、ツェランの同僚）の友人のノイマン氏（フライブルク大学の助手）とシュヴァルツヴァルトのハイデガーの山荘に行った。それから、車の中で重大な話をしたが、ぼくの方からははっきりした言葉で言ったよ。その場にいたノイマン氏が後で、あの話は私にとって〈画期的〉な一面がありましたと言っていた。ぼくはハイデガーがペンを取って、ナチズムがまた台頭している今、何か反響を呼び、また警告となるようなことを書いてくれたらと思っている」（八月二日付け）。この手紙文から察すると、恐らく車中で何か「重大な話」がなされ、ツェランがハイデガーに何かを問い糺したが、何の返答も得られなかったようである。

詩「トートナウベルク」はそうした状況下で、この手紙の日付の前日、即ち八月一日にフランクフルトで書かれている。『書簡集』を編集し、別巻で極めて精密詳細な注を付したベルトラン・バディウによれば、この一節は「トートナウベルク」の幾つかの詩句を注釈・単純化した一種

の解説であるという。確かにそうであろうが、この同じバディウの注の中でもっと留意しておくべきは、この詩の最初の草稿では、ツェランが次のように書いているという指摘である。「我々が対話となってから／そこで／我々はのどが詰まり／そこで／ぼくはのどが詰まり／そのためぼくは、怒りに我を忘れた／三度、四度と」（『書簡集』第二巻、三八二頁）。そしてツェランはこれをヘルダーリンの後期の頌歌の有名な詩句「調停者、けっして信じられなかったおまえ…」からとって拡大し、さらにハイデガーがこの詩句を、『ヘルダーリンと詩の本質』において「我々が対話となってから／我々が互いに相手の話を聞くことができるようになってから」と注釈しているというのである。これは明らかにハイデガーに対する痛烈なる皮肉、批判である。ツェランがヘルダーリンを、またハイデガーのヘルダーリン論を知らないはずはなく、彼がハイデガーに向けた剣の切っ先は鋭く、ブラック・ユーモアに満ちている。しかも、この詩は翌年の一月に愛蔵版で五十部限定出版されるが、ツェランはその第一番をハイデガーに贈っているのだ。なお、ハイデガーはこの出会いの際に、ツェランに「山荘訪問の思い出に」『思惟の経験から』と「朗読会を謝して」『思惟とは何の謂いか』を贈っている。

この問題の詩「トートナウベルク」は、詩人の死の直後の六月に出た詩集『光の衝迫』に収録されるが、一体どのような詩なのか、以下に掲げてみよう。

うさぎぎく、こごめぐさ、  
星の賽をあしらった  
井戸から水を飲む、

山荘の

なかで、

記念帳に、

それは、私の名前にさきだって、  
だれの名前をうけいれたことか、

この記念帳に

書き込まれた一行、

今日、胸中に、

ひとりの思惟者の

きたるべき言葉への

希望にみちた、

森の湿地、均されることもなく、

はくさんちどり、はくさんちどり、ばらばらに、

なまなましいものが、あとから、車中で、

まざまざと、

私たちをはこぶ人も、

ともに耳をかたむけながら、

高位湿原のなかば

あゆんだ丸太

道、

湿ったものが

多く。

（平野嘉彦訳、前掲書三二六―三二七頁）

前述したように、ツェランはこの詩をハイデガーにすぐ贈っているが、恐らく何らかの底意がなかったわけではなく、沈黙をきめこむ哲学者へのある種の皮肉さらには挑戦的なものがあつたのかもしれない。またハイデガーの無言によって味わわれた不快感、失望感と一縷の望みをこめて、それこそこのシュヴァルツヴァルトの「思惟者のきたるべき言葉への／希望にみちた」メッセージを伝えたかったかもしれない。この頃精神を病んでいた詩人の胸中は絶望感とかすかな期待感に複雑に入り乱れていたであろう。病んでいるといえば、詩の冒頭に出てくる花、「うさぎぎく、こごめぐさ」は病める詩人の身体と心を癒やす形象であるという。

ところで、「トートナウベルク」を贈られたハイデガーは、一九六八年一月三十日付けでツェランに礼状を返してきている。これはハイデガーからツェランに送られた唯一の手紙であり、その全文は三十年後の、一九九八年一月三、四日付けの『ノイエ・ツェルヒャー・ツァイトウング』紙上で公表された。早速ツェランは編集者R・アルトマンにハイデガーの返信の三つの主要な文をそのまま伝えるとして、こう書き送っている。「〈トートナウベルク〉を語る詩人の言葉は、ひとつの思想が卑小なるものへ後退しようとした場と風景を名付けている…励ましとも警告ともなる言葉、またその思いに、あの移ろいやすかったシュヴァルツヴァルトでの一日の思い出をとどめる言葉」「あれ以来、我々は黙して互いに多くを語りました」「私は幾つかのことはまだ、いつの日か、無一言を脱して対話に入れるものと思っています」（二月二日付け——『書簡集』



第二巻、五七六頁)。この他、ハイデガーは、「思いがけない素晴らしい贈り物」に礼を述べ、「忘れがたい朗読会」のことに触れ、製本屋にツェランからの贈呈本専用のケースを作らせるとまで言っている。また、詩人の目から見ると冬の山荘がどう見えるのかと、息子が撮った写真まで送りつけたり、ツェランが送ったA・シュティフターの仏訳版について翻訳というものがいかに難しいかと述べ、『道標』を別便で送るが、そのための献辞の葉を同封すると付け加えた後、ひどい風邪のため返事が遅れたと謝している。そして結びにこうある。「私の願いですか？あなたが、しかるべき時に、詩作されるべきことがあなたに語りかけてくる、その言葉を聞くことです」。

さて、この手紙を受け取ったツェランの胸中はどうであったろうか。恐らく、詩人が一縷の望みを託して問い糺したことをはぐらかして何も答えず、冬景色の山荘の写真を送ってくるなど、繊細過敏な詩人の神経を逆撫でしたのではなからうか。彼はハイデガーと一緒に写真を撮ることさえひどくためらった(嫌った)のだから。そうでなくとも、ツェランは、剽窃というあらぬ疑いをかけられて生涯苦しまされたゴル事件の影響も相俟って、ナチズムの過去をもつ者に仮借ない態度を示していた。例えば、パリの国立図書館で、ゲッベルスの雑誌『ダス・ライヒ』(一九四〇〜四四年)のバックナンバーを閲覧し、戦後のドイツ文学界に登場する者の名前がないかどうか調べている。それは、ゴル事件への弁護を求めた四七年グループのリーダー格に元SSがいたり、ニューヨークのゲーテ・インスティテュート院長が元武装SSだったりして、詩人に不当な批判をしていたからである。もっとも、ツェランが嫌悪したのは元ナチのドイツ人だけではない。同じルーマニア出身で、パリに暮らしていたE・シオランにファシストの過去があることを知ると、絶

交している(因みに、『シオラン、エリアーデ、イヨネスコ——ファシズムの忘却』(PCE)という本によれば、この三人ともルーマニア出身である。軽罪のイヨネスコを除く、あとの二人は重罪で、シオランはナチズム加担の過去に一切触れず、いかなる後悔の念も示さなかったし、確信犯的な反ユダヤ主義者で会ったエリアーデはその『回想録』でも友のG・ショーレムへの手紙でも否定し、嘘を貫き通したという。なお、エリアーデに関しては、つい最近もその胡亂な過去を告発する書、フロリアン・テュルカニユ著『ミルチア・エリアーデ、歴史の囚人』が出たが、その見出しには、「このルーマニアの知識人は多くのことを書き、多くのことを消したが、特にヒトラーへの称賛を消した」とある)。したがって、ツェランにとっては本来、ハイデガーは赦せない人物の一人だったのである。ハイデガーの返信は「贖罪の手紙」ではなかった。

さて、「トートナウベルク」の成立過程は見てきたが、この詩を生み出した「出会い」、ツェランとハイデガーという二人の偉大な精神、二つの同じく「絶対的」言語の衝突・出会いは、実際どのようなものだったのだろうか。この二つの大きな詩的存在と精神的存在を結ぶ子午線はどのようにかかっていたのか。ツェランはフライブルク大学のゲーアハルト・パウマン教授の〈ドイチェスゼミナール〉に招かれ、朗読会を行うが、詩人の世話役を務めたのは同教授の助手ゲーアハルト・ノイマンである。特に、ノイマンはこの出会いの目撃者＝証人である。「トートナウベルク」はこうした舞台装置の下で生まれた。またトートナウベルクとは、南西ドイツのシュヴァルツヴァルトにあって、四つの山に囲まれた千メートル余りの高地にあり、夏冬の保養地でもある。ここからは、南シュヴァルツヴァルト、ライン河を隔てアルザスの彼方のヴォージュ

山脈、スイスアルプスへの素晴らしい眺望が望めるという。ただここで留意すべきは、トートナウベルクはハイデガーの単なる「仕事の場合」であっただけでなく、「皆が集まり、政治的修練をする場、所謂『フライブルク・ナチズム』の一種の地上の『聖堂』でもあった…」そこでは、「ハイデガーが大司祭兼秘儀執行司祭の役を演じていただけでなく、強力な政治的指導者の役も果たしていた」のである（V・ファリアス、前掲書、二〇七―八頁）。つまり、この山荘はハイデガーにとって特別な場所であり、『存在と時間』はこの谷間で書かれたのである。

ここトートナウベルクの「森の湿地」を散歩したツェランとハイデガーにとっては、二人の詩的・歴史的言語空間においてはこの地が「死者の眠る草地」に変貌するのである。H||G・ガーダマーによれば、戦後、ナチ加担の嫌で教育を禁じられたハイデガーが隠遁した山荘には、「世界中から、文字通り巡礼」が押し寄せてきたという（『レルヌ』誌、一九八三年四五号、一三八頁）。トートナウベルクは、いわばハイデガー信者の「ヘメック」だったのだ。ツェランは信者ではないが、その一人だったのである。一般にツェランの詩は、そのひとつひとつの詩句、言葉がイマージュ＝形象と観念を秘めており、「煩瑣ともいえるまでに、たえず隠喩へ、寓意へと剥離していく」（平野、前掲書、三三三頁）といわれる。例えば、ツェランの詩におけるヘブライ語の場合、その殆どが聖書か、または典礼からきているとされるが、人とか場所を示す固有名詞でさえ、何らかの意図を秘めているという（J・フェルステイナー「母語、永遠なる言語——ヘブライ語の存在」、『逆光』所収、六五頁）。G・スタイナーによれば、「ツェランの各詩句には神の存在の問題が宿っている」（『マガズィーヌ・リテレー』、二〇〇四年一月、四二七号、一〇二頁）。

「トートナウベルク」の場合も、この題名からしてそうである。J・

ボラックによると、〈Todnauberg〉はまづ Toten-Au（死者の草地）と Berg（山）に分節される。Berg は動詞 bergen に関連づけられ、単に隠すというより、ここでは「守る／保護する」ことを指示するという。さらに、Tot はナチの「トート機関（軍需大臣フリッツ・トートの名からとったもので、特に第三帝国の占領地の戦略的重要な建設土木工事を担った）」と関連づけられ、au は Aushwitz の au を連想させるという。また前述した冒頭の花へうさぎぎく（別称アルニカ）にしても打ち身、挫きに効く薬用植物であり、〈ここめぐさ〉は目の慰めという意味もあり、病める詩人の心身を癒すというわけだ。へうさぎぎくの黄色の花にはナチがユダヤ人に着用を課したあの〈ダビデの星〉の形象が重なり、次の行の〈星の賽〉に連動する。

〈高位湿原のなかば／あゆんだ丸太／道〉の詩句にしても、B・パディウによれば、丸太は棍棒にも通じるし、この分節された〈丸太／道〉は、ハイデガーの有名な『森の道』を暗示し、森の道＝きこり道＝キコリ道、どこにも通じない、即ち行き止まりがない道へと類推が広がる。それは「〈存在〉を忘れたのではないが、人間の歴史が跡づけた残酷な道に關しては恐ろしく健忘症にかかった道」のことだという（前掲書簡集第二巻、五七二頁）。そして、ここでツェランはハイデガーとした、「異様な、堪え難い」中断された森の散歩のことを想起していると指摘している。この森の湿地の散歩は雨によって中断されたというが、ただそれだけではなかったようだ。このように、ツェランの詩句、言葉のメタファーは際限がないほどふくらみ、そうしたメタファーのもたらす喚起力は極めて豊かにして強く、生の歓喜・希望をうたうかと思うと、突然詩人の警策となつてひとの（例えば、ここではハイデガーの）肩をしたたかに打つ。ボラックが仮想した舞台設定を借りると、トートナウベルクの地は地

獄への下降を秘めた「死者のいる草地」(Totman, Totenau)を擁する、いわば現代のカタコンベの場である。山荘の主(ハイデガー)は、この毒気の立ちこめる沼地の解読者たる客(ツェラン)によってそこに導かれる。彼には山荘の主をそこに連れていくだけの理由がたっぷりある。

二人を案内する渡し守Ⅱ証人も控えている。さあ、車に乗って出発というわけだ。ツェランはハイデガーの山荘の近くの湿原を見たいと希望していた。そこでHorbach(詩の中では、Hochmoor「高位湿原」)が選ばれた。この散歩の前に、山荘に立ち寄ることも予定されていた。

Hute(山荘)の原義も本来は、「覆われ、守られた場、庇護された場所」であるという(平野、前掲書、三二九頁)。この山荘で何が話されたかも、分かっていない。また車中での会話の具体的なことも、先に引用したツェランの手紙からも前掲の詩からも推定できない。ただ、「なまなましいものが、あとから、車中で／まざまざと」なのである。G・パウマンは山荘の対話にも車中の会話にも加わっていない。G・ノイマンは車の運転をして詩人と哲学者の話すのを耳にしているし、中断された森の散歩でも傍にいたようだが(真相詳細はマールバッハの文学資料館の関係資料が全面公開されるのを待つしかないのだろうか)。

しかし同時に、ツェランは哲学者の敬意を受け入れ、当然ながら普通のことを話題にしている(彼は決してハイデガーに敬意を表明することはしなかったようだが)。この風光明媚な地の風景やシュヴァルツヴァルトの植物や動物のことを。だがそれも、ツェランにとっては、目的を達成するための戦略的な演出であったようだ。つまり、決定的な問い掛けを発する前にうちとけた、和らいだ雰囲気が必要だったのである。そして後、この問いがなされた。詩人は(ハイデガー・オブセッション)

の桎梏から解放され、自由な身になったように感じた。彼はタブーを破り、禁忌を侵犯したのである。だが同時に、すぐ後悔もし、それを表明してもいる。彼は一種の絶対的な自己矛盾に陥り、いわば躁鬱病の躁の状態にあったようだ。

ツェランはその目的、ハイデガーにそのナチの過去を何らかの言葉で直接問い糺すことに成功した。詩人は自ら仕組んだ作戦行動の展開に満足し、いつものメランコリーを忘れさせるほど高揚していたらしい。パウマンは山荘を出た二人に合流した後、ツェランの穏やかさに驚いているし、フランクフルトで詩人に会った作家マリー・ルイーゼ・カシュニッツは最初はツェランであるとは分からなかったという。前述したように、彼はこの頃まだ病んでいたのに、友人が見間違えるほど元氣に見えたらしい。この点、ラクーラバルトのように失望した詩人の姿を見る者もいるが、ボラックによると、ツェランは時と場合、相手により、心の奥深い闇を見せたり、詩的または政治的に華々しく振る舞って見せたようである(ボラック、前掲書、四五九頁)。

ともあれ、ハイデガーは何も理解しなかったか、理解しようとしなかったか、そういう振りをしたのか、結局のところは分からない。ただ、前記のツェラン宛のハイデガーからの唯一の手紙が示す通り、冷淡さ鈍感さ、さらには無神経、無礼さは歴然としており、これが山荘の来客芳名帖に記された「きたるべき言葉への／希望にみちた」メッセージへの返答なのだろう。ツェランはその鋭利明敏な詩的直観力によって、「トートナウベルク」であらかじめそれに復讐していたといえるかもしれない。ツェランという詩人がハイデガーという「存在」を見抜く眼力は鋭く、その人間的資質を見据えていたのだろう。

ここでJ・ボラックにならって、ハイデガーが「ツェランがユダヤ

人であること」を知らなかったという哲学者の息子ヘルマンの証言を挙げておくべきかもしれない。「母が話してくれたように、父「ハイデガー」は、ご主人「ツェラン」がお亡くなりになった時はじめて、ご主人がユダヤ人であり、ご家庭でどんな運命に見舞われたのかを知ったのです」（『ゼセル・ツェランへの手紙、一九八〇年十二月十日付 ボラック、前掲書、三七四頁）。ボラックはこの証言を殆ど信じがたいが、あり得るかもしれないとしているが、別の証言もある。前記のフライブルクでの朗読会を計画したと伝えるG・パウマンに対し、ハイデガーはこう答えたという。「ずっと前からパウル・ツェランと知り合いになりたいと思っていました。」「…」私は彼の出した本は全部知っているし、彼がたった一人で脱してきた深い危機のこともよく知っています。：パウル・ツェランにシュヴァルトツヴァルトを見せるのは彼にもよいことでしょう」（『マガズイヌ・リテレル』二〇〇二年一月号、九九頁）。いずれが正しいのだろうか？——なお、ハイデガーのユダヤ人観についてはいくつかのエピソード、特にフライブルク大学学長時代のものなどがあるが、にわかには断定し難い。

では、ハイデガーの方はどうか？車中で、彼はくつろぎ、陽気に話していた。それはまるで、山荘でなされた、より深刻な会話を打ち消し、忘れようとするかのようにだ。詩人の方は、このあまりに無遠慮な冗舌に堪えかねるかのように、周りの風景に視線を移す。「はくさんちどり、はくさんちどり、ばらばらに」、とまるで吐き気を押さえるかのよう。そのうち、シュヴァルトツヴァルトの気紛れな雨が沈痛な思いの詩人を助けるかのごとく降りきたり、散歩は中断された。彼には哲学者のあまりに露骨で荒っぽい物言いに堪える力がもうなかったのだ。散歩の中断の本当の理由はこれである。二人は天然の牧場のような「森の湿地」

を散歩しながら、それぞれの孤独な殻に閉じこもっていたのである。

ところで、ハイデガーとの「散歩」といえば、もう一つモーリス・ブランショが紹介している興味深い散歩がある（『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』一九八八年一月二十一日二十八日号）。些か本題から離れるが、これも貴重な証言なので見ておこう。

「アポカリプスを思考する」と題する記事で、ブランショがかなり詳しく紹介しているのは、ハイデガーと弟子のカール・レーヴィットが一九三六年、ローマでした散歩である。一九三六年とは、ハイデガーが学長職を辞して二年後で、この時彼はヘルダーリンについて講演するためにローマに来ていた。ファシズム・イタリアの公式機関「ドイツ学イタリア研究所」の講演シリーズに招待されていたのである。題目は「ヘルダーリンと詩の本質」と「ヨーロッパとドイツ哲学」の二つであった。ユダヤ人のレーヴィットはナチ・ドイツを逃れてローマで本もない貧しい生活をしていた。彼は単にハイデガーの弟子というだけではなく、教え子で、師の子供たちのお守りをするほど親しくしていた。レーヴィットは師と散歩をしながら、ツェランのように、それまで誰もが避けていた厄介で微妙な問題に関して、師に質問しようとした。今ここで、ブランショの引用を全て借用する余裕はないが、次の点は重要である。

「私（レーヴィット）の考えでは、彼（ハイデガー）が国家社会主義に対して取った態度は彼の〈哲学〉と一致していた」「…」ハイデガーは私の説を全面的に認め、彼の歴史性概念が自分の政治関与の基礎であると言っており、自説を展開した」（前掲記事、四三頁）。勿論、このレーヴィットとの重大な出会いについては前記H・オットのハイデガー伝（一九四〇―九二頁）でも、V・ファリアスの書（二七―七三頁）でも詳細に触れられている。

この点、ラクーラバルトにも同じ指摘がある。「一九三三年の政治関与は事故でも過失でもない。」「……ハイデガーの政治関与はその思想と完全に首尾一貫している」（前掲書、四六頁）。但し、ラクーラバルトの場合は、「存在」の哲学者の倫理的な意味での過失責任ではなく、その背後にあるギリシャ・キリスト教的西欧の運命に連なる偉大なドイツの精神的伝統（一部はマルクスをも含めて）こそが問題であるとしている。

これは何を意味するのか。後年の弁明にも拘わらず、ハイデガーは一九三六年、ヒトラーが権力の真っ只中に入った時、〈総統〉への支持を表明し、「国家社会主義はドイツにとって正しい道である」という確信を持っていたのである。この時点で、彼はなおボタンホールにナチの徽章をつけており、党費を払っていたのである。（この徽章については、『マガズィヌ・リテレル』一九九六年十月号）。確かに、まだガス室は存在していないが、ツェランに対するのと違って、ハイデガーは身内の（？）レーヴィットには本音を吐いていたのである。そのハイデガーが、大戦後はフライブルク大学の所謂「浄化委員会」に召喚された時などで弁解こそすれども、自らの政治的過去の責任については無言を貫き通したのである。ブランショはこの無言について、こう述べている。「ハイデガーの修復不能な過去とは、ユダヤ人絶滅に沈黙したこと、パウル・ツェランに対し、赦すべからざることへの謝罪を拒否し沈黙したことだ。この拒絶はツェランを絶望に陥れ、病気にしてしまったが、それはツェランがショーアは西欧に対してその本質を啓示するものであることを知っていたからである」（前掲誌、四五頁）。

また、ブランショはこの書簡の形を取った記事の追伸として、E・レ

ヴィナスのお陰で『存在と時間』を知って文字通り知的ショックを受けたが、ハイデガーという哲学者がそれと同じ言語、同じエクリチュールでヒトラー支持の演説をしていたことを知らされ、二重のショックを受けたと言っている。——なお、ハイデガーの「メア・クルパ」としては、『シュピーゲル』誌上での対談（一九六六年収録、一九七六年公表）、学長職に関する釈明書『事実と思想』（一九八三年）があるが、いずれも死後のものである。

結局のところ、「ユダヤ人「ツェラン」は、ドイツの思惟者「ハイデガー」がその出自と祖国に忠実であり続け、過去の政治関与を誰にも説明せずに、その重みを一人で担い、その個人的行為によって問題にされることはない著作の論理をあくまでも守ろうとしたことが理解できなかった」（ボラック、前掲書、三七三頁）。恐らく、病める詩人はやすらぎを求めてトートナウベルクの山荘にきて、清冽な「井戸の水」に、彼があれほどまでに語りかける「きみ」、もう一人の「きみ」を見出だそうとしたのだろう。だが、彼がそこに見出だしたのは哲学者の無言／沈黙／黙殺だった。懺悔は赦しに、赦しは救済に通じるはずだったが、詩人の試みは失敗に終わった。詩「トートナウベルク」は「こうもり傘とミシンの出会い」の所産だったのである。そして、詩人パウル・ツェランが「ヘラクレイトスとヘルダーリンの継承者」たるマルティン・ハイデガーに発した問いは永遠に答えの無いままなのである。「希望に満ちた」言葉はこなかった。

但し、この一言を期待していたのはひとりツェランだけでなく、ハーバート・マルクーゼもその一人であった。「私たち多くの者は長らくあなたの一語を待ち望んでいました。あなたを明確かつ最終的にこうした

ナチとの一体化から解放するであろう一言、過去の出来事に対するあなたの今日の実際の立場を表明する一言を」（一九四七年八月二十八日付のハインデガー宛の手紙、V・ファリアス、前掲書、三三四―三五頁）。

死の直前の、一九七〇年三月二十六日、ツェランはフライブルクで最後の二度の朗読会を行った。その時、ハインデガーも列席していて二冊の新刊『思索への事柄』と『芸術と空間』を献呈するが、「仰天した」ハインデガーは「ツェランは病気だ——ひどいな」とG・パウマンに漏らしただけであるという。ツェランはゲオルク・ビュヒナー賞受賞講演の『子午線』でこう述べている。「詩は——なんとこの条件のもとにおいてでしよう——一人の——なおまだ——感じとっているものの、あらわれざるものにまなざしを向けているものの、あらわれざるものに問いかけ語りかけているものの詩となります——対話となります——それはしばしば絶望的な対話です」（『パウル・ツェラン詩論集』邦訳、九二頁）。詩「アートのナベルク」とはまさにそのまじな詩であったのである。

主要参考文献

Paul Celan : Choix de poèmes, Gallimard, 1998.  
 Paul Celan : Le Méridien & Autres Proses, La Librairie du XXI<sup>e</sup> Siècle, Seuil, 2002.  
 Michael Humburger : Poems of Paul Celan, Persea Books, 1995.  
 Paul Celan : Entretien dans la montage, Verdier, 2001.  
 Paul Celan : Giséle Celan = Lestranger: Correspondance, I, II vols, La Librairie du XXI<sup>e</sup> Siècle, Seuil, 2001.  
 Alain Suied : Kaddish pour Paul Celan, Obsidiane, 1989.

Alain Suied : Paul Celan et le corps juif, William Blake Co. Edit, 1006.  
 Dominique Janicaud: Heidegger en France, I, II vols., Albin Michel, 2001.  
 Max Dorra : Heidegger, Primo Levi et le séquoia, Gallimard, 2001.  
 Europe-revue littéraire mensuelle — (Paul Celan), janvier = février 2001.  
 RSH (Revue des Sciences Humaines). (Paul Celan), n223, 1991-3.  
 Contre-Jour-Études sur Paul Celan, Cerf, 1986.  
 Jean Bollack : La Grèce de personne, Seuil, 1997.  
 Jean Bollack : Poésie contre poésie, Presses Universitaires de France, 2001.  
 Nicole Parfait : Une certaine idée de l'Allemagne, Desjonquères, 1999.  
 Germanistique : Paul Celan — Poésie et Poétique, Klincksieck, 2002.  
 Revue D'Histoire de la SHOAH, Centre de documentation juive contemporaine, 2001.  
 Gérard Vincent : Sous le soleil noir du temps, L'Age d'Homme, 1991.  
 Didier Cahen : Qui a peur de la littérature ?, Kimé, 2001.  
 パウル・ツェラン (飯吉光夫訳) : パウル・ツェラン詩論集、静地社、一九八六年  
 パウル・ツェラン (中村朝子訳) : パウル・ツェラン全詩集・第一、二、三巻、青土社、一九九二年  
 パウル・ツェラン (飯吉光夫訳) : 闇から闇へ—パウル・ツェラン詩集、思潮社、一九九三年  
 パウル・ツェラン (飯吉光夫訳) : パウル・ツェラン詩集、思潮社、一九九七年  
 パウル・ツェラン=ネリー・ザックス : パウル・ツェラン=ネリー・ザックス「往復書簡」、ビブロス、一九九六年

生野幸吉：闇の子午線―パウル・ツェラン、岩波書店、一九九〇年  
飯吉光夫：パウル・ツェラン、小沢書店、一九九〇年

「ユリイカ」―特集・ツェラン〈灰の栄光〉、青土社、一九九二年  
「現代思想」―総特集・ハイデガーの思想、青土社、一九九九年

野家啓一（他）：物語、岩波書店、一九九〇年

平野嘉彦：ツェランもしくは狂気のフローラ、未来社、二〇〇二年

ツェラン研究の現在：詩集「息の転回」第一部注釈、中央大学人文科学

研究所、二〇〇〇年

鍛冶哲郎：ツェラン——言葉の身ぶりと記憶、鳥影社、一九九七年

界兀歩：「だれでもないもの」の「抵抗」パウル・ツェランと詩、もく

馬社、一九八二年

森 治：ツェラン、清水書院、一九九六年

イスラエル・ハルフェン（相原勝／北彰訳）：パウル・ツェラン―若き

日の伝説、未来社、一九九六年

フーゴ・オット（北川他訳）：マルティン・ハイデガー、未来社、一九九五

年

ヴィクトル・ファリアス（山本尤訳）：ハイデガーとナチズム、名古屋

大学出版会、一九九〇年

中田光雄：政治と哲学―ハイデガーとナチズム論争史Ⅱ決算Ⅱ（上・

下巻）、岩波書店、二〇〇二年

ジョージ・スタイナー（生松敬三訳）：ハイデガー、岩波書店、一九九二

年

ジャック・デリダ（飯吉光夫訳）：シボレート―パウル・ツェランのた

めに、岩波書店、一九九三年

フィリップ・ラクーラバルト（谷口博史訳）：経験としての詩、未来社、

一九九七年

「現代詩手帖」、思想社、一九九〇年5月号